

成澤むつ子著

## 『自立の開拓者丸岡秀子』

わたしの女性史学習ノート』

寺澤 正著

## 『三代の男たちと丸岡秀子』

評者：松尾 純子

### はじめに

昨年（1999年）、6月に寺澤正『三代の男たちと丸岡秀子』、7月に成澤むつ子『自立の開拓者丸岡秀子 わたしの女性史学習ノート』と、相次いで丸岡秀子の評伝が出た（以下、それぞれ『三代の男たち』『自立の開拓者』と略記する）。

丸岡秀子は1990年5月25日に87歳で亡くなった。彼女はその著作などから“評論家”という肩書きで著名だが、農村問題・女性問題・教育問題などの非常に幅広い分野にわたって、研究者としても社会運動家としても、第一級の業績を数多く残している。没後、追悼集は何冊か出されたが、完成に時間のかかる伝記の類は出版されていなかった。しかしようやく、そうした伝記的研究の成果が現れる時期が来たようである。今回取り上げる2冊はその先駆けだろう。

ここでは、それぞれの内容を紹介し対比することによって、丸岡秀子研究の到達点を確認し、今後の課題を考えてみたい。ただし『三代の男たち』は、正確に言えば、丸岡と縁の深かった井田麟一と彼の父・甥および丸岡という4人の評伝をあわせたものである。また、私の専門領域が女性史と関係が深いこともあって、副題にそれを含み、丸岡の評伝としてのまとまりがある『自立の開拓者』を中心に取り上げる結果になった。この点をはじめにお断りしておく。

### 1. 『自立の開拓者丸岡秀子』の概要

それでは、成澤氏の『自立の開拓者』から始めよう。（なお、本書では多くの丸岡秀子の著書が引用され、出版社名・出版年も明記されている。ここでは、紙幅の都合上それらの書誌事項はすべて省略した。）

著者の成澤むつ子氏は1931年に新潟県で生まれた。丸岡の最後の著書『いのち、韻あり』で彼女と出会って以来、こつこつと丸岡の著作や関係資料の調査を進めてきた在野の研究者である。本書のもとには「丸岡秀子を読む」という題で『東京部落研会報』に連載された。

本書では、「はじめに 太鼓楼に登る」と「おわりに ひとすじの道」の間が19章に分けられて、誕生から1950年代までの丸岡秀子の半生がたどられている。また、丸岡と関わりの深かった平塚らいてうと富本一枝についての付論があり、巻末には索引がつけられている。なお、序文を立命館大学教授の鈴木良氏が書いている。

「はじめに」の副題にある太鼓楼とは、丸岡の母校、今の旧中込学校にある塔のことである。太鼓楼の「天井には、中込を中心点にして、東西南北に日本および世界の都市や山の名前がそれぞれの方角に書かれている」（6頁）。丸岡は『いのち、韻あり』、自伝的小説『ひとすじの道』第1部の最後「自立」などで、太鼓楼に登って見たものが自分に与えた影響の大きさについて書いている。確かに太鼓楼は、成澤氏の言うとおり「丸岡秀子の人生における『ひとすじの道』の原点である」（4頁）。それと同時に、「旧中込学校をたずねたことがこの著を執筆する契機となった」（216頁）という意味で、成澤氏にとっても重要な場所である。丸岡が見た天井の図と景色を、成澤氏も太鼓楼に登って見た。このような、同じ目の高さから立って深く理解しようとする基本的な姿勢が本書には最後まで貫かれ

ており、それが本書の特徴でもあり魅力ともなっている。

丸岡の誕生から夫の丸岡重堯(戦前の一時期、当研究所の研究員であった)との死別までの道のりは、『ひとすじの道』に詳しい。成澤氏はその流れに従いながらも、他の著作や資料・証言などと引き比べながら、創作と事実を注意深く見分ける地道な作業を積み重ねている。章を並べれば「1 秀子の生い立ち」から「2 祖父母の家」「3 長野高等女学校時代」「4 奈良女高師時代」「5 富本憲吉・一枝夫妻のこと」「6 富本一枝をたずねて」「7 丸岡重堯と大原社研・東洋経済新報社」「8 重堯と社会経済研究所・社会思想社」「9 重堯との結婚」までがそれにあたる。表題に挙げられているような、丸岡と関わりの深い人々・団体についてもていねいに調べられている。これらの調査結果とあわせて、『ひとすじの道』とは異なる、この時期までの彼女の実像がかなり明らかになった。

そのなかには、従来の年譜の誤りを正すという、丸岡秀子研究への重要な貢献もある。まず、丸岡重堯との結婚生活を1925年夏から29年3月までの3年数ヶ月と確定した。これまでは重堯の没年が28年とされていた。それとともに娘・明子の誕生年も27年から28年と訂正された。また、川村女学院勤務の期間を26年4月から翌年3月までと確定した。

だがその一方で、次章の「10 産業組合中央会への就職」では、就職した年は明記されなかった。丸岡の文章に従うと、1929年あるいは30年の春か夏と、確定できないらしい。成澤氏は、「何年のことなのかがさっぱりわからず、団体名も誤っていて度々訂正しなければならなかった」と、「秀子の文章や発言の曖昧さ」に苦労させられたことを「あとがき」で記している。この就職年のほかには、産組中央会の退職年、

石井東一との再婚年、北京への渡航年などが明記されていない。これらの確定は今後の課題だろう。

第10章では、城西消費購買組合、婦人消費組合協会との関わりにも触れている。「11 『日本農村婦人問題』を著す」では、本の執筆過程を描き内容を検討している。

「12 なぜ、産組中央会に就職したか」では、それまでの各章の記述をふまえて、成澤氏の丸岡秀子理解が次のように小括的にまとめられている。「秀子が農村婦人へ強い関心をもった原点は、母の早世、自身の生い立ち、そして貧しい祖父母との生活体験にあった。……夫の志を継承しようと、農村婦人の調査・研究に着手したとは言えない。……主体的に農村・農村婦人問題を選んだことが、彼女の著作から読み取れるのである」(97頁)。この部分は先行研究にたいする批判ともなっている。丸岡は、その主体的選択の結果、高給の教師ではなく、農村研究を可能にする産組中央会就職の道を選び、本を著すことになった、と成澤氏は理解する。その本、つまり『日本農村婦人問題』は、秀子が自らの体験から農村の問題、農村婦人の問題を、絶えず問いかけ、発酵させ、社会の問題として大きく発展させ、普遍化させた調査と研究の書である」(101頁)。また、辛く苦しい農村調査を乗り越えさせた要因の一つに、富本憲吉の影響があるとも指摘している。

「13 北京時代」は『婦女新聞』に掲載された丸岡の文章などが多少紹介されている程度である。この時代を丸岡自身がほとんど書き残していないこともあり、成澤氏も「今のところ資料を入手していない」(104頁)。

北京から引き揚げたのは1946年5月、丸岡は43歳だった。「14 秀子の活動再開 日協婦人対策部」「15 主婦連の結成をめぐる」「16 農村婦人協会の設立と秀子の活動」「17 全国

「教研集会で果たした役割」「18 婦団連の結成と世界婦人大会」「19 母親運動に果たした役割」は、引き揚げ後の活動をたどっている。表題の団体についても丹念に追うことで、戦後女性史を描く結果にもなっている。それは、民間の一個人が、日本のみならず世界の女性運動に大きな影響を与え、連帯を生み出していく過程である。丸岡の人生を追うことが、日本の女性運動史のひとつの重要な流れを追っていくことにもなるということを確認させられた。主婦連の「主婦の店」選定運動の問題、教研集会と女性教師・母親との関わりと、そこから「日本母親大会開催の原動力の主要な一つ」(145頁)が生み出されたとする指摘、世界母親大会に農村代表の土川マツエが選出される過程など、私には学ぶことがとても多かった。丸岡秀子研究の重要性の提示とともに、女性史の方法の提示という点にも本書の意義がある。

「おわりに」では、保健婦との交流が「農村問題、教育問題、生協運動、母親運動……と並ぶ秀子の重要な活動の一つ」(181頁)という位置づけで取り上げられた。

成澤氏は最後に次のように評価している。「秀子は女性の地位向上のために尽力した類まれな啓発者であり、オルガナイザーであると同時に、女性問題研究者としても大きな業績を残しているのである」(186頁)。貧しく育ちながらも最高の教育を受け、富本夫妻との出会いや結婚など、ひじょうにまれな生育歴をもった。「それが彼女には最大限有効に作用し、彼女の社会的還元によって、けっして少なくない人びとが生きる上で多大な影響を受け、希望を与えられた」(187頁)。

ところで、北京時代の調査不足については先に述べたが、序文の鈴木氏もその点を指摘し、さらに、本書に取り上げられなかった人物として、井田麟一の名前を挙げている。寺澤氏の

『三代の男たち』は、まさにその彼と丸岡秀子の中軸にした評伝である。

## 2. 『三代の男たちと丸岡秀子』の成立事情

著者の寺澤正氏は、1930年東京で生まれ、詩誌『涯』を1969年から20号まで発行、詩集をはじめ食べものや農村に関する数冊の著作がある。本書の構成は、「プロローグ」と「井田麟一の死 - 1936.5 -」、「近藤巨士の死 - 1952.5 -」、「井田孝平の死 - 1936.12 -」、「旅立つ丸岡秀子 - 1938.12 -」の4章からなり、巻末には参考文献資料の一覧がある。また、詩人の草野比佐男氏が序文を寄せている。

本書のもとには「三代の男たち 井田孝平・井田麟一・近藤巨士の死と生と」という題で『涯』17号、19号(1977年)および雑誌『未来』(1977~78年)に連載された。『未来』の連載時と比較すると、当時未完に終わった井田孝平の章が大幅に改稿、他の二人の章も加筆されているほかに、丸岡秀子の章が追加されている。

寺澤氏が丸岡宅を頻繁に訪問するようになったのは、1969年から亡くなるまでの約20年間だという。丸岡は「埋葬を許さず 井田麟一について」という文章を『文化評論』の71年9月号に発表した。寺澤氏はそれを『涯』に転載、それが新聞の文芸欄に紹介された。「『涯』はたちまち完売。いわばまったく無名の詩誌から「井田麟一の死と生」がマスコミにも知られ、高く評価されると丸岡秀子は「じつに愉快ね」と、朗らかな笑顔を見せてくれた」という(158頁)。これをきっかけに、寺澤氏は三代の男たちについて書くことになった。

丸岡は、薄給の産組中央会への就職を決めてから、生活費を補うために下宿人を置き、家庭教師もした。井田麟一はそのとき紹介された3人の下宿人のうちのひとりであった。共産党の



活動に関わり治安維持法違反で1932年に逮捕され、翌年暮れに出獄、36年に27歳で病没した。麟一の父・孝平は二葉亭四迷を師としたロシア語学者で、日露協会学校哈爾濱学園の初代校長でもあった。近藤巨士は麟一の甥で、法政大学哲学科に在籍中、1952年の血のメーデーに参加し、死亡した二人のうちのひとりであった。

この3人の男性の死と生が、本書では、それぞれの短い章のなかで濃密に描かれている。序文で草野氏は次のように評している。「詳しく、ときに煩雑に思えるほど、かれらの関係を追って時代を行きつ戻りつする。丸岡先生の最も身近にいて、多年に亙って聴き溜めたもろもろと、それにもとづく綿密な調査の賜物であろう」（9頁）。そのとおり、丸岡への聞き取り・資料調査を土台にして、さらにそれらが豊かな感性によってつなげられたことで、本書のような読み応えのある叙述が可能になった。だが、彼ら3人についてのこれ以上の紹介は、主題から離れるので、ここでは控えたい。丸岡秀子との関わりに限って、『自立の開拓者』と対比しながら次でもう少し取り上げることにする。

### 3. 両書の対比

両書はともに、丸岡の膨大な著作をおおいに利用している。だが、その用い方は実に対照的である。例えば、石井東一との再婚について、『自立の開拓者』は段落ひとつ、わずか5行で済ませているのに対し、『三代の男たち』は6ページにわたって詳述している。この違いの原因・意味について考えてみたい。

第1に、文体の違いがある。前者は抑制の効いた、あえてドラマ性を除こうとするかのような文体、後者は逆に叙情的な描写を多く引き、それが生きるような文体をとっている。第2に、丸岡とのつながり方の違い、つまり、文章を通して学んだ成澤氏と、本人から直に学んだ寺澤

氏という違いがあるだろう。

丸岡のように業績厚く書き残したものの多い人物の場合、それらを整序して並べるだけでも長大な伝記になるだろう。分量を抑えるには、事実関係の確認に叙述を絞ることが最も典型的な方法である。さらにそれらを批判的に吟味するには、対象から一定の距離を置くことが必要となる。その結果、『自立の開拓者』は、序文にあるとおり「努力を重ねて確かめた事実を正確にたんとと語る」形式が取られ、そのなかで「丸岡の人生を学ぶ」という著者の意図が表現されているのである。

一方の『三代の男たち』は、「あとがき」にあるとおり「総体としての“ことば”をいかに克明に書くことができるか」に著者の意図がある。ここでの“ことば”とは、「わたしとあなたの間いいのちがある」と丸岡の教えを受けた寺澤氏によって“ことば=いのち”と位置づけられたものである。それは、意識的表現としての文学・美術・音楽などに示されるものに限らず、無意識的表現でもある身体表現にまで及ぶものである。石井東一との再婚についての長い叙述も、“ことば”を「克明に書く」ために必要であった。寺澤氏は「ひとりの人間のなかに秘められた、生の時間を成り立たせている内実の風景を詳述するのは難しい」とも書いている（233頁）。丸岡秀子の章では、日中戦争開始当時に焦点を絞って、彼女の「内実の風景」が描かれている。ここで浮かび上がる丸岡秀子像から、読者は、『自立の開拓者』のような方法ではこぼれ落ちてしまった、まさに“いのち”と呼ぶにふさわしい豊かなイメージを受け取ることができる。

とはいえ、雑誌連載時は本名だった井田麟一の婚約者が、本書では注記なしに変名に直されていたり、丸岡の産組中央会への就職を1927年の春とし（55頁）、それを前提に時代背景を語

るなど、叙述を“史実”としては信用しきれない面も本書にはある。『自立の開拓者』では明記されなかった北京への渡航年は、『三代の男たち』では1938年12月とある。井田麟一と丸岡秀子を結んだ線として、前者は社会思想社同人の蠟山政道・嘉治隆一の名を挙げ、後者は新居格ら城西消費組合のつてを挙げている。“史実”と“内実”の双方から、多面的に丸岡秀子を理解していくことが、今後とも重要な課題であろう。対照的な手法の2冊の併読によって、こうした点も明らかになった。

#### 4. 丸岡秀子研究の今後の課題

丸岡秀子研究はまだ緒についたばかりの段階にある。今後求められる多くの課題のいくつかを試みに挙げてみたい。

一般的に見れば、今後の研究には、書き残されていないものの考証という、より難しい仕事が残されている。何が書き残されていないのか、それを見つけたすことも容易ではないが、北京時代、夫との生活、まずはこれらの解明が課題だろう。

前者については、両書がともに丸岡の8年前後に及ぶ北京での生活に迫れなかったことを見ても、解明にはかなりの困難が予想される。再婚後まもなく、戦争協力を強いる産組中央会を丸岡夫妻はそろって辞め北京へ渡ったが、そこでもなお戦争の重圧から逃れることはできなかったのだろう。丸岡は『声は無けれど』で次のように書いている。

わたしの第二の結婚への経緯、それも素描でしかない叙述であってみれば、どなたの心を何ほども引くことはないだろう。しかし、この過程を省いては、わたしの時代閉塞期の過ごし方はわかってもらえない。日本を離れ、北京で、若い応召兵の誰れ彼れを世話し、大学の民主的教授たちと密やか

な接触を持ちつつ、子育てに専念していた当時の主婦の自己封殺生活のことはわかってもらえない。(寺澤247-8頁より重引)

「わかってもらえない」と口を閉ざした丸岡だが、農村の女性たちの現実、母と祖母の生と死の場合には、「わかってもらえない」との思いが逆に書くほうへと向かった。成澤氏は、丸岡の「生ま身の論理」から「『この思い、わかってもらってたまるか』という烈しいものがわたしをつき上げてくるからなのです」という文章を引いている(98頁)。

また後者の夫婦生活については、夫の石井東一氏への聞き取りが不可欠であろう。どちらの解明にも、“わかるう”とする努力を、アプローチの違いはあっても、地道に続けていくことが求められる。

“史実”の確定の側面から言えば、丸岡の正確な年譜と著作目録の作成が当面の大きな課題である。『自立の開拓者』には、残念なことに年譜も著作目録もなかった。新事実も明らかにしたのだから、せめて略年譜と文中の典拠・参照文献一覧は巻末に出して欲しかった。

最後に、私自身の問題関心にひきつけながら、課題を3つほど提示したい。第1は、夫婦間(家族内)における平等意識の内実の緻密な検討と、その歴史的な位置づけという課題である。

『ひとすじの道』第3部では「お互いを対等と認め合う重雄と恵子の結婚生活」が描かれている(成澤67頁)。「所帯を持ったその日から林檎箱の机をはさんで経済学の勉強をはじめた」姿も目に浮かぶ(寺澤55頁)。しかし、そこでは、次のような会話が交わされていた。

恵子「新聞社の経済部は忙わしいの」  
重雄「いずれ、統計を作る仕事や、計算なんかやってもらうようになると思う」

この部分は両書ともに引用されていない。近い将来の秘書の役割を期待され、経済学の手ほど

きを受ける姿、形を変えた“内助”を当然視するかのような姿が、ここから読み取れはしないだろうか。対等の人間として二人で勉強をはじめたという姿とは微妙に異なるのではないだろうか。丸岡が主観として描いた“対等な夫婦関係”を批判的に吟味し、多方面から検討していく必要があるだろう。

第2は、戦後の丸岡の活動に見られる思想の形成過程の問題である。成澤氏は、戦後の活動において丸岡が、「自信と誇りを持って進むことが大切」と農村女性を励まし(135頁)、「母親を「大きい人間関係の結び目」であると強調した」と指摘している(177頁)。さらに、「本質的に対立していない者同士を見誤ることなく、決して対立させず、連帯の重要性を訴えた」という評価や(145頁)、どんな人も「無視することなく、ともに手を携えていくべきであると訴え」るような、発言できない立場に目を向ける丸岡の姿勢にも注目している(147頁)。しかし、丸岡がこうした思想をどのようにして獲得したかの考察は十分になされていない。彼女の思想の独自性を示す重要な点であるだけに、さらなる分析が必要だろう。

最後の課題は、丸岡と生活記録運動との関わりの解明である。『自立の開拓者』では、丸岡が保健婦たちの生活記録運動に携わったことが明らかにされている(184頁)。本書ではそれ以外に彼女と生活記録運動との関わりは取り上げられていない。しかし1950年代に丸岡は、生活記録運動の代表的な指導者である鶴見和子と、世界母親大会準備会・生活つづり方の編集など、何度か行動をともにしている。

また、成澤氏は丸岡と山代巴とのつながりを

取り上げたが、『私たちに語りかけたもの丸岡秀子さんを偲ぶ集い記録』に山代が寄せた文章を引用した後、「彼女は秀子の態度に学び、継承した点があると言えるであろう」(96頁)と位置づけるにとどまっている。しかし丸岡は、ある座談会で「国民の側に主体性をつくるために、何をなすべきか」という問いに対し、次のように発言している。ちなみに、このとき丸岡は59歳、山代は50歳であった。

山代さんのお話しによるとね。あの方、地域でよくやっておられる方なんですけども、やはり婦人のばあいは生活記録をやってことは、ひとつたいへん役にたってる、生活記録をやってるってひとはね、それこそ天下国家の問題が速くわかるんですね。それこそ地味な実践だけれども、信頼できるっていつてらっしゃいましたね。それからやはり読書活動ね。実際にやってらっしゃる方の言葉として、うかがったんですけどね。(浪江虔・丸岡秀子・田沼肇「てい談 働く人たちの生活と意識」『月刊社会教育』1963年1月号、国土社)

戦後女性史において生活記録運動をどのように位置づけるかは大きな課題であり、この側面からの丸岡秀子研究も今後は必要である。

(成澤むつ子著『自立の開拓者丸岡秀子 わたしの女性史学習ノート』創風社、1999年7月、219頁+vi頁、1500円+税  
寺澤正著『三代の男たちと丸岡秀子』同時代社、1999年6月、303頁、2800円+税)  
(まつお・じゅんこ 立教大学大学院博士後期課程、法政大学大原社会問題研究所兼任研究員)